

## 加辺さんとマツバギク科とワイン

加 藤 雅 啓 (植 物 園)

加辺さんは東京農業大学を卒業された後、昭和29年に奉職されて以来ずっと植物園のために尽してこられました。植物園の戦後史とともに歩んでこられたことになります。長い間教務職員として務めてこられましたが、長年の地道な研究活動が認められて昨年9月助手に昇任されました。同じ職場で働く者として大変嬉しく思ったものです。

加辺さんはそれはきまじめな方でした。不まじめな私が明らかにそれとわかる冗談をいっても、いつも本気になさるほどでした。加辺さんは研究部の植物育成を担当してこられたのですが、大学院生の研究用植物にまでこころを配られ、私もし

ろいろ御助言をいただきました。加辺さんのまじめな性格は業務以外のいろいろな面でもあらわれました。コンパの時でも、それほどお酒をたしなむというのではないのですが、遅くまで一緒につきあって下さいました。御自宅のある栃木県までいつも最終便かその前の便に飛びのって帰られましたが、翌朝はいつも通りに出勤されました。

加辺さんは主として南アフリカの半砂漠にはえるマツバギク科を研究してこられました。この植物は乾燥適応の形態を示し、stone plants (石ころ草) と呼ばれるものがあるように愛嬌のある植物です。御自宅に専用温室をつくられるほど、こ

の植物を愛されています。そういえば、加辺さんのお顔もどことなくその植物に似ている感じがします。最近加辺さんはこの植物の花粉形態の研究をずっとしてこられました。極度に近視の加辺さんには酷とも思えるような細かい電顕レベルのお仕事をされました。しかし加辺さんはそれをむしろ楽しんでおられるようでした。育成業務の傍らこの研究を続けられたのですが、さぞかしいろいろ御苦労があったことでしょう。

マツバギク科植物がとりもつ縁だと思いますが、加辺さんは南アフリカ産のワインを定期的に購入されています。コンパの時などはいつもそれを差

し入れて卓上を賑して下さいました。時々冷蔵庫の中に置いておかれるのですが、よく一寸失敬したものです。きっとわかっておられたと思うのですが、慈悲深い加辺さんは決して怒るようなことはされず、しばらくしてまた1瓶黙って補充されるのでした。

加辺さん、この3月に退職されるわけですが、長い間御苦勞様でした。しかし、4月以後もしばらくは御研究の整理のために植物園に顔を出されとのこと、本当のお別れはその後ということになります。